

## 知的障害者や発達障害者の生涯学習の必要性に対する一般市民の意識

－共生社会の中での「障害者の生涯学習」に関する考察－

井上信次<sup>1)</sup>\*・末光茂<sup>2) 4)</sup>・大月政和<sup>3)</sup>・小田桐早苗<sup>4)</sup>

1) 新見公立大学健康科学部地域福祉学科 2) 社会福祉法人旭川荘 旭川荘総合研究所  
3) 社会福祉法人旭川荘 カレッジ旭川荘 4) 川崎医療福祉大学医療福祉学部医療福祉学科

(2021年12月1日受付、12月22日受理)

知的障害者や発達障害者の生涯学習を促進させるための基礎研究として、一般市民を対象に行った質問紙調査の結果を分析した。調査では文部科学省が2018年に実施した「障害者本人等への学校卒業後の学習活動に関するアンケート調査」で使用された、生涯学習の内容に関する8項目を用いた。調査票は2021年6月8日～6月10日に楽天インサイト株式会社に登録しているモニターを対象に、年代4区分(10-20歳代、30歳代、40歳代、50歳代以上)ごとに回答者がそれぞれ110人になるまで調査を継続した。分析の結果、第1に、障害者の生涯学習の8つの具体的な項目への必要性に対する肯定的な意識が明らかになった。第2に、2つの項目について、必要と考える程度が知的障害者と発達障害者と異なっていた。障害者の生涯学習を推進する際は、知的障害者と発達障害者への正しい理解の普及をすすめつつ、障害に応じた生涯学習の推進が必要であると考えた。

(キーワード) 知的障害者、発達障害者、生涯学習

### 1 緒言

文部科学省は2018年に「障害者本人等への学校卒業後の学習活動に関するアンケート調査」(以下、障害者本人調査)を実施し、それを踏まえて「学校卒業後における障害者の学びの推進に関する有識者会議」は、知的障害者等の大学における学びの場が必要だとした<sup>1)</sup>。障害者本人調査の回答者は4,650名であり、身体障害(視覚・聴覚・肢体不自由(車いす、ストレッチャー必要・不要))、知的障害、精神障害、発達障害(自閉症あり・なし)、その他(音声・言語等障害、内部障害等)として、それぞれ400名以上の回答者(障害者又は家族に障害者がいる者)が含まれている。障害者本人調査では障害者の生涯学習活動への参加状況、参加の阻害要因・促進要因、学習ニーズ等を尋ねている。

その一つに学校卒業後の学習経験とニーズを尋ねる調査項目がある。具体的には「学校段階で学んだ内容の維持・再学習に関する活動」「余暇・レクリエーション活動」「文化芸術活動」「健康の維持・増進、スポーツ活動」「個人の生活に必要な知識・スキルに関する学習(日常生活を向上させるための衣食住等の学習)」「社会生活に必要な知識・スキルに関する学習(自立した生活のための学習)」「仕事のスキルアップや資格・免許取得など、職業生活に関わる学習」「一緒に刺激し合って向上していける仲間づくり、学習意欲を高めてくれる人間関係等に関する

学習」の8項目である。それぞれに例が示されている。

報告書では、知的障害者は学習経験について「余暇・レクリエーション活動(42.7%)」が他の障害種を有する者に比較して高い傾向にあったと指摘した。さらに発達障害者(自閉症あり)は、ニーズについて「個人の生活に必要な知識・スキルに関する学習(33.6%)」「社会生活に必要な知識・スキルに関する学習(38.7%)」「仕事のスキルアップや資格・免許取得など、職業生活に関わる学習(32.2%)」「一緒に刺激し合って向上していける仲間づくり、学習意欲を高めてくれる人間関係等に関する学習(29.9%)」とする比率が高い傾向にある<sup>1)</sup>と指摘した。

筆者らは、今後、障害者の生涯学習をより推進していくためには、障害をもたない一般市民の認識が重要であると考えた。なぜならば、共生社会における生涯学習は、障害者のみの集団で完結するものではなく、一般社会の中で行う学習だからである。そのため、社会のなかでの障害者の生涯学習への許容度が低い場合、障害者自身もつ生涯学習のニーズに関係なく、生涯学習は推進しないと考える。政策面では障害者の生涯学習の重要性が指摘されているが<sup>1)</sup>、法律により知的障害者を受け入れる環境を整備した公認の大学はいまだない<sup>2)</sup>。特に成人期知的障害者の教育的支援が必要だという指摘があるが<sup>3) 4) 5)</sup>、高等学校卒業後のキャリア支援全般が不十分だといえる<sup>6) 7) 8) 9) 10) 11)</sup>。

以上の問題関心の下、知的障害者や発達障害者の生涯学

\*連絡先: 井上信次 新見公立大学健康科学部地域福祉学科 718-8585 新見市西方1263-2

習を促進させるための基礎研究として、一般市民を対象に行った質問紙調査の結果を分析した。「障害者の生涯学習」で対象となる障害者は、身体障害者や精神障害者等も含むが、本研究では知的障害者や発達障害者に限定する。なぜならば現在、特別支援学校に在籍する障害がある人の内、約9割は知的障害者だからである<sup>12)</sup>。

## II 方法<sup>13)</sup>

本研究で用いた調査について、別の論文で既に報告した<sup>13)</sup>、本稿は当該論文とは異なるデータを解析し、考察したものである。

### 1. 研究目的・対象

知的障害者と発達障害者の生涯学習に対する認識を明らかにするために、一般市民を対象に質問紙調査を実施した。

### 2. 調査票の配布・回収

2021年6月8日～6月10日に楽天インサイト株式会社に登録しているモニターを対象に、年代4区分(10-20歳代、30歳代、40歳代、50歳代以上)ごとに回答者がそれぞれ110人になるまで調査を継続した。

### 3. 有効回答者数及び欠損値の扱い

全ての調査票を有効回答票とした。ただし「わからない」については分析から除外した。そのため分析ごとに分析数が異なる。

### 4. 調査票の構成

属性として「性別」「年齢」等を尋ねた。本稿の分析で用いる調査項目は以下の通りである。個別の生涯学習の必要性を尋ねるために、「学校段階で学んだ内容の維持・再学習に関する活動」「余暇・レクリエーション活動」「文化芸術活動」「健康の維持・増進、スポーツ活動」「個人の生活に必要な知識・スキルに関する学習(日常生活を向上させるための衣食住等の学習)」「社会生活に必要な知識・スキルに関する学習(自立した生活のための学習)」「仕事のスキルアップや資格・免許取得など、職業生活に関わる学習」「一緒に刺激し合って向上していける仲間づくり、学習意欲を高めてくれる人間関係等に関する学習」の8項目(以下、生涯学習8項目)を、「1. 必要だと思わない」から「4. 必要だと思う」までの4件法と、「5. わからない」から構成した。各項目には、表1の通り、具体例を付記した。本項目は、障害者本人調査と同様の項目である。

### 5. 分析方法

生涯学習8項目の各項目に対する「必要でない」と「必要ではない」という認識の差を明確にするために、「必要だと思わない」と「あまり必要だと思わない」を回答した人数の合算と、「まあ必要だと思う」と「必要だと思う」と回答した人数の合算との差に関して、適合度検定( $\chi^2$ 検定)を行った。知的障害者と発達障害者によって必要性の意識

が異なるかどうかを明らかにするために、Wilcoxonの符号付き順位検定を行った。分析にはIBM SPSS Statistics26.0を用いた。有意水準は5%未満、有意差傾向は10%未満とした。

## 6. 用語の定義

本研究では、生涯学習を「人々が生涯に行うあらゆる学習、すなわち、学校教育、家庭教育、社会教育、文化活動、スポーツ活動、レクリエーション活動、ボランティア活動、企業内教育、趣味など様々な場や機会において行う学習」とし、調査票の冒頭に付した。さらに「発達障害や知的障害がある人については、以下を想定して下さい」として以下を、調査開始前に提示した。

- ・発達障害、知的障害ともに高等学校(含む、特別支援学校、中等教育学校)に進学できる人
- ・疑いを含みます。診断を受けているかどうか、手帳の取得有無は問いません。
- ・知的障害と発達障害の2つの特徴が重複してみられる場合がありますが、知的障害の特徴が主にみられる場合は知的障害、発達障害の特徴が主にみられる場合は発達障害として回答してください。

## 7. 倫理的配慮

回答開始前に楽天インサイト株式会社の個人情報保護方針に関する情報を提示し、「同意し、アンケート開始」のバナーをクリック後、回答が開始された。バナーのクリックにより、調査の協力を得たものとした。本研究について、新見公立大学研究倫理審査委員会の承認を受けた(承認番号219 承認日2021年4月19日)。それらに従い実施した。

## III 結果

回答は440人から得られた。全てを有効回答票とした。

### 1. 回答者の属性

男性が204人(46.4%)であり、女性が236人(53.6%)であった。

### 2. 生涯学習8項目に関する意識の違い

生涯学習8項目への必要性の認識について、知的障害者と発達障害者とに分けて集計した。両障害とも、全項目について8割以上が「まあ必要だと思う」「必要だと思う」と回答していた。さらに適合度検定( $\chi^2$ 検定)の結果、全項目について「必要でない」が「必要ではない」より多く回答する傾向が明らかになった。

次に、知的障害者、発達障害者の生涯学習の必要性について、障害による回答の違いがあるかを明らかにするために、「わからない」を除いた、Wilcoxonの符号付き順位検定を行った。その結果、「健康の維持・増進、スポーツ活動」「個人の生活に必要な知識・スキルに関する学習(日常生活を向上させるための衣食住等の学習)」について

有意差が認められた。両項目とも、発達障害者の方が、知的障害者よりも必要がないと回答したことが明らかになった。

#### IV 考察

一般市民は、全体として生涯学習8項目に対して肯定的な意識をもっていたことが明らかになった。筆者らの別の分析で、「知的障害や発達障害（自閉症スペクトラム症、学習障害、注意欠如多動症など）のある人たちへの生涯学習について、あなたはどのように思いますか。」という包括的質問に対して、知的障害者と発達障害者ともに、「とても必要であると思う」と「必要である」との合計が80%弱であったことが明らかになっている<sup>13)</sup>。障害者本人調査のように、項目による意識の違いについて明確な差は認められないが、社会の中で知的障害者や発達障害者の生涯学習が認められる可能性は高い。一方で、必要という認識があっても、実際に実現可能か、また一般市民のそれぞれがその活動に積極的に関与するかは不明である。

生涯学習8項目への必要性のうち、「健康の維持・増進、スポーツ活動」「個人の生活に必要な知識・スキルに関する学習（日常生活を向上させるための衣食住等の学習）」について、発達障害者よりも知的障害者への学習が必要であるという回答傾向が認められた。一般市民が健康や日常生活に関する知識・スキルに対する不安を、発達障害者よりも知的障害者に対して持っている可能性が示唆される。しかしながら、この差が一般市民の両障害者に対する関わりの経験や知識から生じているかは不明である。経験の少なさや知識の乏しさに因るバイアスの可能性も否定できない。また一般市民のなかで、知的障害者と発達障害者と

の区別がどの程度明確に理解されているかは不明である。知的障害者や発達障害者の生涯学習を推進するうえで、知的障害者と発達障害者への正しい理解の普及をすすめてつ、障害に応じた生涯学習の推進が必要であると考えられる。

#### V 本研究の限界と課題

本研究は障害者本人調査の調査項目を使用した。生涯学習8項目がダブル・バーレル質問になっている可能性がある。また、例示している内容がそれぞれ排他的かどうかは検討していない。包括的な研究だけでなく、特定の生涯学習の内容に特化した研究が今後必要となる。

#### VI 結論

知的障害者や発達障害者の生涯学習を促進させるための基礎研究として、一般市民を対象に行った質問紙調査の結果を分析した。調査では文部科学省が2018年に実施した「障害者本人等への学校卒業後の学習活動に関するアンケート調査」で使用された、生涯学習の内容に関する8項目を用いた。分析の結果、第1に障害者の生涯学習の必要性に対する肯定的な意識が明らかになった。第2に、2つの項目（「健康の維持・増進、スポーツ活動」「個人の生活に必要な知識・スキルに関する学習（日常生活を向上させるための衣食住等の学習）」）について、知的障害者と発達障害者との間で、必要だと考える程度が異なっていた。しかしながらこの違いが知的障害者と発達障害者との区別を十分に理解していることによって生じたかどうかは不明である。障害者の生涯学習を推進する際は、知的障害者と発達障害者への正しい理解の普及をすすめてつ、障害に応じ

表1. 生涯学習の必要性

						合計	適合度検定	Wilcoxon の	
							( $\chi^2$ 検定)	符号付き順位検定	
		必要だと 思わない	あまり必要だ と思わない	まあ必要だと思う	必要だと思う	わからない	$\chi^2$ 値	Z	
1.学校段階で学んだ内容の維持・再学習	知的障害者	11 (2.5)	43 (9.8)	186 (42.3)	184 (37.3)	36 (8.2)	440 (100.0)	216.9 **	-1.839 †
	発達障害者	6 (1.4)	43 (9.8)	169 (38.4)	185 (42.0)	37 (8.4)	440 (100.0)	230.9 **	
2.余暇・レクリエーション活動	知的障害者	9 (2.0)	26 (5.9)	163 (37.0)	210 (47.7)	32 (7.3)	440 (100.0)	280.0 **	-1.695 †
	発達障害者	8 (1.8)	32 (7.3)	172 (39.1)	199 (45.2)	29 (6.6)	440 (100.0)	266.6 **	
3.文化芸術活動	知的障害者	6 (1.4)	36 (8.2)	154 (35.0)	216 (49.1)	28 (6.4)	440 (100.0)	261.1 **	-0.561
	発達障害者	4 (0.9)	37 (8.4)	161 (36.6)	204 (46.4)	34 (7.7)	440 (100.0)	258.6 **	
4.健康の維持・増進、スポーツ活動	知的障害者	4 (0.9)	25 (5.7)	152 (34.5)	232 (52.7)	27 (6.1)	440 (100.0)	305.1 **	-2.037 *
	発達障害者	7 (1.6)	29 (6.6)	150 (34.1)	223 (50.7)	31 (7.0)	440 (100.0)	277.7 **	
5.個人の生活に必要な知識・スキルに関する学習（日常生活を向上させるための衣食住等の学習）	知的障害者	3 (0.7)	12 (2.7)	134 (30.5)	261 (59.3)	30 (6.8)	440 (100.0)	352.2 **	-2.155 *
	発達障害者	4 (0.9)	22 (5.0)	134 (30.5)	243 (55.2)	37 (8.4)	440 (100.0)	305.7 **	
6.社会生活に必要な知識・スキルに関する学習（自立した生活のための学習）	知的障害者	3 (0.7)	17 (3.9)	132 (30.0)	255 (58.0)	33 (7.5)	440 (100.0)	330.9 **	-0.872
	発達障害者	3 (0.7)	22 (5.0)	129 (29.3)	249 (56.6)	37 (8.4)	440 (100.0)	309.2 **	
7.仕事のスキルアップや資格・免許取得など、職業生活に関わる学習	知的障害者	3 (0.7)	27 (6.1)	157 (35.7)	220 (50.0)	33 (7.5)	440 (100.0)	295.8 **	-0.08
	発達障害者	6 (1.4)	27 (6.1)	144 (32.7)	221 (50.2)	42 (9.5)	440 (100.0)	276.9 **	
8.一緒に刺激し合って向上している仲間づくり、学習意欲を高めてくれる人間関係に関する学習	知的障害者	4 (0.9)	28 (6.4)	163 (37.0)	204 (46.4)	41 (9.3)	440 (100.0)	281.3 **	-1.365
	発達障害者	5 (1.1)	34 (7.7)	158 (35.5)	202 (45.9)	43 (9.8)	440 (100.0)	256.3 **	

注1) 単位: 人 (%)

注2) 調査票にはそれぞれ以下の例を示した

1. 学校段階で学んだ内容の維持・再学習に関する活動 例: 計算や漢字などの生活に不可欠な基礎的な学習、文学や歴史、自然科学などに関する学習活動、時事問題や社会問題等に関する活動

2. 余暇・レクリエーション活動 例: 行楽的な活動(運動会、地域の祭等)、旅行・合宿、親戚を築める活動、同窓会活動

3. 文化芸術活動 例: 音楽、絵画、造形、手芸、書道、書写などの表現、鑑賞活動

4. 健康の維持・増進、スポーツ活動 例: ウォーキング、ランニング(ジョギング)、マラソン、体操、自転車、サイクリング、ハイキング、エアロビクス、ヨガ、ダンス、水泳、ボウリング、サッカー、野球、ソフトボール、

5. 個人の生活に必要な知識・スキルに関する学習 例: 料理、栄養や食事、医学・健康法、裁縫・編み物、家庭生活や結婚生活、防災・防犯、家族の介護、家庭教育、幼児教育、教育問題

7. 仕事のスキルアップや資格・免許取得など、職業生活に関わる学習 例: 就業体験、職場実習、金銭管理、契約(就労)、労働法規、仕事に関する知識の習得や資格の取得、就職や転職に関する知識の習得や資格の取得、主体性をもって物事に取り組み意欲・やり遂げる力、ストレスマネジメント、社会体験や生活体験、農業体験

8. 一緒に刺激し合って向上している仲間づくり、学習意欲を高めてくれる人間関係に関する学習 例: 主体的・協力的に調べ、まとめ、発表する活動、自ら学習や交流を企画するスキルに関する学習、人とかかわる力、コミュニケーション能力、集団生活でのルール・マナー、仲間と学ぶい場、さまざまな人々との関わりによって成長する場

注3) 適合度検定( $\chi^2$ 検定)は「必要だと思わない」と「あまり必要だと思わない」を回答した人数の合算と、「まあ必要だと思う」と「必要だと思う」と回答した人数の合算との差に関して行った。

注4) Wilcoxon の符号付き順位検定は「わからない」を除外して行った。

注5) \* $p < 0.05$ , † $p < 0.10$

た生涯学習の推進が必要であると考え。

本研究は、文部科学省科研費「知的障害・発達障害児者のインクルーシブ教育の制度刷新にむけた国際比較研究」(19K02177)により実施された。

にした知的・発達障害がある人の生涯学習に関する意識調査－共生社会における障害者の生涯学習－. 新見公立大学紀要, 42, 37-46, 2021.

## 文献

- 1) 学校卒業後における障害者の学びの推進に関する有識者会議:障害者の生涯学習の推進方策について(報告). 2019.
- 2) 日本学生支援機構:令和元年度(2019年度)大学,短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の修学支援に関する実態調査結果報告書. 2020.
- 3) 菅野敦:「知的障害児・者」の生涯発達と支援領域.発達障害支援システム研究, 18(1), 1-9, 2019.
- 4) 今枝史雄・菅野敦:成人期知的障害者の基礎的学習と社会的な学習の関連について.生涯学習支援における学習内容の抽出利用統計を見る.東京学芸大学教育実践研究支援センター紀要, 6, 79-88, 2010.
- 5) 今枝史雄・菅野敦:成人期知的障害者の生涯学習支援で取り込まれる学習内容と基礎的学習能力との関連.特殊教育学研究, 54(3), 145-155, 2016.
- 6) 山本由佳莉・三木裕和:知的障害のある青年の進路及び職業に関する意識の研究－フォーカス・グループ・インタビューを通して－.鳥取大学地域学部紀要 地域学論集, 12(1), 93-99, 2015.
- 7) 磯野浩二・佐藤慎二:知的障害特別支援学校におけるキャリア教育に関する意識調査:千葉県内の知的障害特別支援学校全学部主事への質問紙調査を通して.植草学園短期大学紀要, 13, 33-38, 2012.
- 8) 海口浩芳:「発達障害等のある生徒の進路状況調査」結果報告.拓殖大学教職課程年報, 3, 38-67, 2020.
- 9) 佐久間宏・大根田充男:知的障害児の進路指導をめぐる課題(3)現場実習の意義と役割の分析.宇都宮大学教育学部紀要 第1部, 58, 21-53, 2008.
- 10) 大根田充男・佐久間宏:知的障害児の進路指導をめぐる課題(2)現場実習の意義と役割の分析.宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要, 25, 137-157, 2002.
- 11) 大根田充男・佐久間宏:知的障害児の進路指導をめぐる課題 現場実習の意義と役割の分析.宇都宮大学教育学部教育実践研究指導センター紀要, 20, 49-73, 1997.
- 12) 新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議:日本の特別支援教育の状況について.  
[https://www.mext.go.jp/kaigisiryoy/2019/09/\\_icsFiles/afildfile/2019/09/24/1421554\\_3\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/kaigisiryoy/2019/09/_icsFiles/afildfile/2019/09/24/1421554_3_1.pdf). 2019, 2021年9月1日確認.
- 13) 井上信次,末光茂,大月政和,小田桐早苗:一般市民を対象